

『今月の天候と農作業』

通巻第5558号
8月号
平成25年 8月 2日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	20	30	50

【概要】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べて晴れの日が多いでしょう。

期間の前半は、少雨の状態が続く見込みです。また、期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、多い確率50%です。

<1週目の予報> 8月 3日(土)～ 8月 9日(金)

天気は、太平洋高気圧に覆われておおむね晴れるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、高い確率70%です。

<2週目の予報> 8月 10日(土)～ 8月 16日(金)

天気は、太平洋高気圧に覆われて平年に比べて晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率60%です。

<3週目から4週目の予報> 8月 17日(土)～ 8月 30日(金)

天気は、太平洋高気圧に覆われて平年に比べて晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

普通作物

◆ 普通期水稻

現在、幼穂が伸長している時期で、下旬には出穂を迎えます。今年は移植後の天候が高温であったために、生育は旺盛になっています。防除や追肥など重要な管理が多くなりますので、気象や病害虫発生など各種情報に基づき、適期に適切な管理を行いましょう。

1 水管理

根の健全化を図るため間断かん水を行いましょう。ただし、穂ばらみ期から出穂開花期にかけての水不足は、穂の発育に悪影響が出ますので湛水状態とします。台風襲来時は深水管理とし、台風通過後も吹返しの乾燥風による生育障害が発生することがあるので、急な落水は控えます。

2 追肥

ヒノヒカリでは出穂前15～20日頃で幼穂の長さが1匁程になった頃に、葉色に合わせて適量の穂肥を行います。おてんとそだちは良食味を保つために、地区基準を参考にこれより少ない量とします。なお、田植え時に一発型の肥料を用いたほ場では施用する必要はありません。

3 病害虫防除

葉いもちは、夏期の高温期間は一時停滞し目立たなくなりますが、今年の発生量は平年より多い状況にあり、このため注意報が発令されています。穂いもちが発生すると大きく減収するので、出穂前と穂揃期頃に防除します。特に中山間地や常発地では、天候不順で防除時期を逃さないよう注意します。

トビイロウンカ（秋ウンカ）は今後増えてきます。防除時期は幼虫孵化以降ですので、地域ごとの発生予察情報や、ほ場での状況をよく確認して防除しましょう。

カメムシによる斑点米は等級格下げの原因になります。防除は穂揃い期とその10日後の2回は行います。また、カメムシの密度低下のため、畦畔や水田周囲の草刈りも効果的です。出穂の2週間以上前迄に草刈りを行います。出穂直前に草刈りを行うと、逆にカメムシを水田に追い込むことになるので注意します。防除の際は薬剤が周辺作物に飛散しないよう気をつけましょう。

◆ 大豆

1 中耕、培土

雑草対策や発根を促すため、中耕、培土を2回行います。第1回目は、本葉三葉期に第一節の位置まで、第2回目は、本葉五葉期に第三節の位置まで行います。時期が遅れると逆に根を傷めるので、開花期までに終わります。

2 排水対策

大豆は湿害に弱いので、大雨による冠水や滞水を避けるため、額縁排水などの排水対策を実施します。

3 病虫害防除

ハスモンヨトウの発生時期になりますが、薬剤防除は若齢幼虫時が効果的です。ほ場での観察に努め、孵化直後の幼虫食害による白い斑葉（網目状の被害）を見つけたら直ちに防除します。

◆ そば

1 ほ場の選定

そばは、湿害に弱い作物ですので、排水の良いほ場を選び額縁排水などの排水対策を行います。

2 播種

播種時期は、山間地域は8月上旬～中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

10㎡当たりの播種量は、条播が6㎏、散播では10㎏程度で、発芽直後に大雨に遭遇しないよう天候を見ながら播種します。

施肥量は窒素成分で10㎡当たり2.5㎏です。

(鎌田 博人)

施設野菜

8月は施設野菜の育苗開始時期となります。この時期の高温は、果菜類では雌花の着生や発達に大きな影響を与えますので、温度管理に注意が必要です。

育苗ハウスは、害虫の侵入防止対策として防虫ネットが設置してあるものがほとんどですが、ハウス内の温度が高くなる傾向にありますので、遮光資材を利用し昼間の温度上昇を防ぐことが大切です。遮光資材は、遮光

率の低いものを日中の高温時に使用し、曇雨天日や朝夕は光が当たるようにすることが必要です。

◆ きゅうり

露地抑制・ハウス抑制栽培の育苗期にあたります。高温期の育苗のため、茎葉の生育が早く、地上部に対して根量が少ない場合が多く、定植後の活着不良等が懸念されますので、健苗育成のためにはハウス内の温度を下げ、こまめにかん水を行うことが必要となります。

また、この時期はアブラムシやミナミキイロアザミウマが媒介するウイルスによって発生するモザイク病（CMV等）や黄化えそ病（MYSV）の発生に注意が必要となります。防虫ネットにより媒介昆虫の侵入を防ぐとともに、定期的に薬剤防除を行います。また、ウイルス病の伝染源となる庭先での自家用のきゅうり、かぼちゃなどの栽培を控えるとともにハウス周辺の除草の徹底が重要となります。

◆ ピーマン

セル苗など若苗で定植する場合には、初期生育が旺盛になるため、基肥を減肥したり、活着後のかん水を控える等、草勢を調整する必要があります。

鉢上げを行い二次育苗する場合には、生育が進むのに伴い、蒸散も盛んになるので、日中乾燥しないようにかん水を適宜行ないます。しかし、夜間多湿になると徒長や疫病発生の原因になるので、夕方のかん水や多かん水は避けます。さらに、生育が進むと葉が重なり徒長するので鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。

◆ トマト

ミニトマトの早い作型では、下旬よりセル苗を利用したダイレクト定植が始まりますが、初期生育が旺盛となり異常茎（めがね）が発生しやすくなりますので、基肥を減肥したり、活着後のかん水を控えるなど、草勢を調整する必要があります。また、黄化葉巻病（TYLCV）の発生への注意が必要となりますので、媒介虫であるコナジラミ類の防除の徹底が必要となります。

◆ いちご

株の生育に伴う蒸散量の増加や高温により、鉢が乾燥しやすくなるため、午前中を基本に十分なかん水を行います。また、水のかかりの悪いところは手かん水を行うなどこまめな管理が必要となります。追肥は、緩効性の粒状肥料等を置き肥する場合は、中旬までに終わらせますが、極端な肥料切れは苗質に大きく影響しますので、苗の生育状況に応じた、液肥や葉面散布等による施肥管理が必要となります。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆ 秋冬野菜の土づくり

8月は秋冬野菜の植付けにむけて土づくりを行う時期です。収量・品質を高めるには、深耕による物理性の改善、土壌pHの調整による化学性の改善、堆肥等の有機質資材の投入による生物性の改善と3つの視点で土づくりを行う事が重要です。深耕は作土層の拡大や排水性の向上をねらいに、pHは分析にもとづく石灰資材の施用、堆肥は完熟したものを用います。

◆ 加工にんじん

播種時期となります。高台地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となりますが、にんじんは一齐に発芽させることが多収するための重要なポイントとなります。土壌が乾燥又は過湿の状態では、発芽率が低下しますので、かん水施設のあるほ場では播種前に適度なかん水を行ってから耕耘・播種します。干ばつ等で土壌が乾燥しやすい場合は播種後かん水を行います。

◆ 食用かんしょ

4月に植え付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなりますので適期に収穫しましょう。普通堀では秋にかけて鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発する時期になりますので、薬剤防除を行います。

◆ さといも

マルチ栽培の石川さといもは収穫を遅らせると水晶芋や割れ芋等が発生し品質が低下しますので盆までには収穫を終えましょう。

中生種では8月の土壌水分量が収量・品質に大きく影響しますので、かん水が可能なほ場では、スプリンクラーの利用や通路かん水などを行ってください。また、今月から来月にかけてはヨトウムシ類が発生しますので防除を徹底しましょう。

◆ キャベツ・はくさい

年末～年明けに出荷する作型の播種時期となります。苗床として、サイドに防虫ネットを張ったハウスを準備し、120～150穴セルトレイで育苗します。25日前後で定植期に達しますので、本ぽの準備が遅れないようにしましょう。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

今年の温州みかんは、結果量がやや多くなっています。Mサイズの果実横径は8月10日の時点で50から56^{ミリ}が理想です。肥大が遅れている樹については、さらに摘果を行いましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は、6月下旬の花の結実が少なく、結果時期が遅い園地が多くなっています。結果の遅れた園地では、初期肥大の確保と早期摘果が特に重要なポイントとなります。結果確認後の施肥とかん水を十分に行いましょう。また、8月下旬からは、傷果を中心とした荒摘果を開始しましょう。

夜温が早く低下する中山間地域では、9月から加温が必要な園地が出てきます。早めに準備を進めておきましょう。

◆ 日向夏

この時期から日焼け果が発生してきますので、ダニ防除を実施し、袋掛けを行って、良品確保に努めましょう。

◆ マンゴー

今年は安定した日照により剪定後の枝の緑化が順調に進んでいます。しかし、剪定が遅れた園や高樹齢の園では枝の発生や緑化の遅れが見られます。緑化の遅れは、花芽分化や結果に悪影響を及ぼします。葉面散布や新梢の間引きで葉に光が当たりやすくすることで、新梢の早期緑化を図りましょう。

2 落葉果樹

◆ ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の作柄にも影響を及ぼします。べと病等の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆ クリ

今月から収穫が始まります。毎日収穫し、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病虫害果や腐敗果を減らすことができ、その後の品質も良好になります。

3 台風対策

防風施設は、果実への被害を軽減させます。防風ネットの点検を実施しましょう。

また、長時間の冠水は病気の発生を助長します。排水溝の整備を行いましょう。

幼木や高接ぎ樹の誘引・結束も確認しましょう。

台風通過後は、折損部の保護や倒伏樹の引き起こしと根締めを行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策などで行う薬剤散布は、枝葉や果実に付着した薬剤が台風の雨によって表面に広がることで、病原菌などの発芽や伸長を抑制し、防除効果を発揮します。防除は、台風襲来前に実施しましょう。

海岸近くで塩害の恐れがある時は、直ちに散水して塩分を洗い落としましょう。

4 果樹全般

◆ 除草

夏の下草は、樹体との養水分の競合や病害虫の温床となるので、草刈りを行いましょ。刈った草で土壌表面を被うことで、土壌の乾燥防止による細根の発生促進や、土壌浸食の防止につながります。除草剤と草刈りを上手に組み合わせて作業を行いましょ。

(山口和典)

花き

◆ 夏秋ギク

強い日射により成長点付近の葉焼けが懸念されますので、遮光や換気、葉面散布剤の散布、かん水等の対策を実施して下さい。「フローラル優香」の9月出荷では高温や消灯遅れ、多肥によって貫生花の発生が多くなりますので、適正管理に努めましょ。

「精の一世」についても消灯後の高温により扁平花や奇形花が発生しますので、施設内の気温をできるだけ下げるために遮光や換気等を行いましょ。

◆ 秋ギク

各作型の作業計画に応じて、育苗、冷蔵、定植などの作業を進めて下さい。冷蔵は穂・苗の貯蔵・確保と成長促進のために2～4℃で実施しますが、冷蔵期間が長期になると穂の傷みが多くなります。さらに、「神馬」系統の品種は開花遅延も懸念されますので、冷蔵は3週間までにしてください。「神馬66-4」については、従来の「神馬」と比較してやや早生系統ですので、11月作型の電照開始は早めに実施しましょ。

◆ ホオズキ

最も暑い時期の出荷になりますので、収穫後速やかに水につけるとともに、結束時に水切りを実施し、十分な水揚げを行いましょ。ホオズキは系統により着果や実の形・「シミ果」の発生程度等が異なります。また、ウイルス性の病害も増加していますので、本年の栽培株で着果や品質の良い株があったら印を付けその地下茎を確保し、翌年は区別して栽培して下

さい。出荷終了後は、土壌伝染性のウイルス対策として残渣の腐熟処理を徹底して実施しましょう。

◆ スイートピー

品種と植え付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。種子できるだけ充実した大きいサイズのものを選びます。吸水中に酸素不足を防止するため吸水処理は流水中で行って下さい。また、吸水時の水温が低いと発芽率が低下しますので、吸水時の水温は30℃程度に保ちましょう。処理には定植数より多めの種子を準備し、未発芽種子は取り除いて冷蔵を行います。冷蔵中は庫内温度や水分を定期的に点検して下さい。中山間地域の一部では植え付けが始まりますが、遮光等の高温対策は十分に行ってください。

◆ シキミ

気温が高くダニ類の被害が多い季節になります。定期的な防除で良品生産に努めて下さい。最も需要のある時期ですが、高温期でバクテリアが繁殖しやすいので清潔な水で水揚げを行い、出荷先で事故品が出ないように気をつけましょう。また、黒シミ斑点病については、今月も引き続き防除を徹底し、感染防止に努めましょう。

◆ デルフィニウム

育苗中は、定植時に本葉10枚前後に達するのを目標にかん水、施肥を行って下さい。中山間地では定植が始まります。早期抽だいを抑えるためにハウス内は換気や遮光をおこない、できるだけ気温の上昇を防ぎましょう。定植から抽だいまでは株が充実するように十分にかん水して下さい。また、チビクロバネキノコバエとうどんこ病等の病害虫を本ぽに持ち込まないように定植前に防除するとともに、ほ場での発生に注意してください。

◆ トルコギキョウ

平坦地では種子冷蔵終了後の夜冷育苗が始まります。発芽後は定期的に追肥を行い、苗の充実を図ります。育苗中の高温や乾燥で低温の効果が失われますので、日中は十分な換気を行うとともに、適切なかん水管理に努めて下さい。中山間地では出荷が続きます。早めの摘蕾、摘芽に心がけ、品質向上につなげましょう。

◆ 台風対策

特に被害の出やすい露地・雨よけ栽培は、排水溝を整備し、冠水をしないようにするとともに、防風ネットを設置し、茎葉の損傷や倒伏を防ぎましょう。

シキミ等の花木類の幼木は、倒れないように支柱等でしっかりと固定しましょう。倒伏した場合は、台風通過後に樹を段階的に引き起こして、正常な状態に戻しましょう。

また、茎や葉の損傷が発生した場合は、薬剤防除や液肥の葉面散布を行い、草勢等の回復を図りましょう。

(中村 広)

畜産

1 家畜

1年で一番暑い時期を迎え、家畜の生産性が低下します。できる限りの暑熱対策を行いましょう。密飼いをさけ、適正な頭羽数での飼養管理をお願いします。畜舎内の通風や換気には特に気をつけて下さい。家畜も人間同様、暑さだけでなく湿度にも弱いため、気温がそう高なくても十分な暑熱対策が必要です。牛舎への風通しを良くするため、牛舎付近の雑草の刈り取りや、風通しの妨げになる資材等を片付けましょう。日差しが牛舎内へ直接あたらないよう、寒冷紗を設置することも効果的です。屋根への散水や白色塗料塗布、石灰散布も畜舎内温度を下げるのに有効な方法です。また畜舎ファンの清掃（ほこり取り）も風量アップに繋がるだけでなく、電気代の節約にもなります。給水器もこまめに清掃し、家畜がいつでも新鮮な水を十分飲めるようにして下さい。高温多湿でサイレージの2次発酵がおきやすく腐敗も懸念されます。サイレージを取り出した後は、ビニルをすぐにかけて、できるだけ空気を抜くようにして下さい。給与時に腐敗やカビを見つけたり、通常のサイレージ臭と違うニオイがした場合は廃棄するよう心がけて下さい。牛では暑熱期、濃厚飼料と粗飼料給与のバランスが崩れ、ルーメンアシドーシスが発生しやすくなります。良質な粗飼料を十分食い込ませたのを確認してから、濃厚飼料を給与するようにして下さい。

2 飼料作物

飼料作物ではトウモロコシの収穫時期になります。収穫適期を心がけ、サイレージ調製に当たっては、十分に踏圧を行い、ビニルをすきまなく掛け、嫌気発酵（できるだけ空気を入れない）するようにします。ソルゴーの2番草までの収穫を考える場合は再生を考え8月中旬までに1番草を刈り取ります。収穫後は追肥を行って下さい。

3 家畜防疫

蚊やサシバエなどの吸血昆虫も発生しやすくなります。牛舎内の消石灰消毒は、ウイルスや細菌に対し有効でありまた、害虫の発生を抑える効果もありますので、ぜひ取り組んで下さい。日頃からの防疫対策の徹底も引き続きお願いします。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

これからの作業は、来年の一番茶の母枝となる秋芽の充実と、葉層や芽数の確保を図るために大変重要となります。

1 最終摘採と干害防止

秋芽の生育期間を確保するため、最終摘採は、山間地域では7月中旬、その他の地域では8月上旬を目安に実施します。また、遅れ芽や徒長枝は、秋芽を切らないように注意して整枝します。

高温・乾燥は秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきに25～30ミリの散水が効果的です。

2 病虫害の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病等の病虫害が発生しやすくなりますので、秋芽萌芽期と三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除します。

また、クワシロカイガラムシは、8月中旬～9月上旬に第三世代幼虫のふ化が予想されますので、発生状況を確認し、ふ化最盛期に防除します。

なお、防除を行う場合には、各地区の防除暦に従い適正に実施して下さい。

い。

3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では8月下旬までに、これ以外は9月上旬までに、土壌診断結果に基づき、地域の施肥基準に準じて施用します。

土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに堆肥を1～2ト施用し深耕を行い、土づくりと発根促進による肥効率の向上に努めて下さい。

(佐藤 邦彦)

◆ しいたけ

しいたけの菌糸は、高温に弱く、ほだ木内の温度が35℃以上になると菌が死滅する恐れがあります。

夏場の高温によるほだ木の乾燥は、しいたけの発生量への影響や品質の低下につながるため、高温対策を中心としたほだ木管理が必要です。伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぐとともに、伏込地周囲の除伐や下刈を行い、風通しを良くしましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、害菌が発生しやすい時期ですので、ほだ場をこまめに巡回し、害菌の発生が確認された場合は、被害木を取り除いて隔離したり、被害がひどい場合には焼却処分しましょう。

このほか、収量アップのためには古ほだ木からの発生が重要です。天地返しやほだ回しを行い、しいたけ菌の活性化を図りましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、夏期深耕や通常期販売に向けての出荷規格確認などが主な作業になります。また総掻き後、残幹処理が終了していない場合は、病害の耕種的防除のために早期に除去し、ほ地外へ持ち出しましょう。

1 夏期深耕は、スキ等により反転深耕を行い、立枯病など土壌中の病原菌密度低下や、土作りのために重要な作業となります。今年病害が出たほ地は特に念入りに行い、10日置きにロータリー耕を行うように努めましょう。

2 貯蔵害虫発生防止のためセリコは通常期買入終了まで設置し、飛来予察に努めましょう。また、貯蔵中の吸湿防止の為、全包ポリ袋梱包を行い

ましょう。

3 通常期販売に向けて出荷物の異物、過水分、色損葉の混合などの確認を行いましょう。

(松元 貴光)

内容の詳細について

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラカルト

計画的な一斉除草
病害虫対策に有効



◆ 害虫防除のための除草

雑草はいろいろな所に生えます。田畑に雑草が生えると栽培作物の生育が悪くなりますが、それだけでなく病害虫の発生源にもなります。それを防ぐためには、田畑の中だけで無く、周囲にある雑草にも何らかの対策を行う必要があります。害虫が増える前にほ場内外の除草をしっかりと行うことは、水稲や露地作、とりわけ施設園芸にとっては重要な防除対策です。

◆ 害虫を集める雑草

水田では、イネより先に穂が出るヒエは周囲のカメムシを集めてしまいます。同様に、畦に生えるイネ科等の雑草は斑点米カメムシの発生と密接な関係があります。穂が出る寸前ではなく、出穂の1～2週間前には除草を行いましょう。

◆ ウイルスを媒介する害虫

近年、施設園芸では多くのウイルス病が発生し、大きな被害が出ています。例えば、キュウリ黄化えそ病のウイルスはミナミキイロアザミウマによって、トマト黄化えそ病とキクえそ病のウイルスはミカンキイロアザミウマによって媒介されます。これらのアザミウマは薬剤の効果が低く、農薬だけでは十分な防除効果が得られません。防除対策には様々な方法を組み合わせる必要がありますが、除草は重要な防除法の一つです。

◆ 資材の活用

ビニルハウスの周囲など、ほ場の周囲の除草を定期的に行うのは、かなり負担になります。このため可能な場所に抑草シートなどを敷くことも良い方法です。この抑草シートに光反射マルチを併用すれば、更に高い防除効果が期待できます。

また、除草が必要なのはビニルハウスなどの施設の外だけではありませ

ません。被覆資材などの陰になって防除が難しい場所に冬に雑草が生えると、そこが病害虫の発生源になってしまいます。そういう場所には、マルチ資材などを上手に利用して栽培を始める前に冬の雑草対策をしておきましょう。



◆ 地域一斉除草のススメ

施設栽培が始まる前の8月中旬に地域で一斉に除草したところ、粘着板で捕獲できるアザミウマ数は大幅に低下しました。広い範囲で高い防除効果が期待できますので、施設園芸作物を定植する2～3週間前に地域で一斉に除草することを推奨しています。

◆ 計画的な除草

除草は、労力がかかる作業です。しかし、雑草対策は重要な病害虫対策でもあります。作物の栽培と病害虫の発生時期を考え、計画的に除草を行いましょう。

(黒木 修一)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稲	いもち病(葉) ※ 紋枯病	多 並	<p>葉いもちの発生が多くなっているため7月25日に注意報を発表しました。箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。</p> <p>トビイロウンカは、6月末から7月始めにかけて飛来が確認されました。わずかな飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。</p> <p>セジロウンカも5月下旬から飛来が確認されています。</p> <p>ウンカ類の第2世代の防除適期は8月中旬になると予想されます。</p> <p>コブノメイガは、6月第6半旬が主要飛来と考えられ、第2世代の防除適期は8月第2～3半旬頃になると予想されます。</p>
	トビイロウンカ (秋ウンカ) セジロウンカ (夏ウンカ) コブノメイガ	やや多 並 並	
野菜類等	アブラムシ類 ハスモンヨトウ等 のチョウ目害虫	やや少 並	<p>アブラムシ類は、わずかな発生量でもウイルス病を媒介して、キュウリやピーマン等に大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。</p> <p>ハスモンヨトウは、ふ化直後は葉裏に集合して加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。</p>
カンキツ類	かいよう病 黒点病	やや少 並	<p>これからが本格的な台風の襲来時期です。台風による茎葉の損傷はかいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。</p> <p>黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、防除後の積算降水量が300mmになると次の防除が必要です。</p>
	ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	やや多 並	
茶	炭疽病 もち病 輪斑病 ※※	並 並 やや多	<p>秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。</p> <p>輪斑病の発生がやや多いため7月25日に防除情報を発表しました。</p> <p>輪斑病の発生は気温の高い二～三番茶の摘採後に多い傾向があります。二番茶摘採後に発病葉が見られたら三番茶残葉で多発する可能性が高いので必ず防除を行います。</p>
	チャノコクモソハマキ チャハマキ チャノソガ カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメコバイ クワシロカガラムシ	並 並 並 やや少 並 やや多 並	

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は注意報、※※は防除情報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。

病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。